

随想

名寄の昔、そして今のあれこれ

— 明治生まれの偉人達を偲ぶ — その(3)

前名寄信用金庫理事長 名取忠夫さんのこと

上川北部医師会会長 中村 稔

名取忠夫さんが逝去されて何年か経った。名寄地方酒造業界の草分け、老舗・名取酒造株式会社の3代目当主であった。現在の西條デパート駐車場、駅前通りを挟んで向側にある一寸シャレタ建物の寿栄堂（酒造米精白工場跡）などがその名残である。又西4条南7丁目の一角に白壁、土蔵造りの本格的な蔵があり、その一隅に、道北では珍しい悪霊をさえぎる神—道祖神—がまつられていた。明治時代の市街図によると、名取家は4条通りの最南端にあり、南側は熊笹が茂り、放牧されていた馬が時折熊に襲われたという。この世とあの世の境を守り、家業繁栄を祈って、創業者元造氏が建立したものである（なよろ百話）。なお、道祖神は現在、市立総合病院に近い名取純子さんの庭にまつられていると言う。

名取さんは、旧札幌1中から北大農学部を卒業されたが、在学中に先代忠重氏が急逝されたため、卒業後に名寄に帰って家業を継承。翌年、26才の若さで町議に当選。その後町長、初代市長、名寄商工会議所会頭、ロータリークラブ初代会長、名寄カントリークラブ初代社長、名寄信用金庫理事長など多くの公職を歴任されたばかりでなく、旭川方面国家公安委員長を勤められるなど、道北の顔とも言うべき大物であった。忠夫さんを含め名取家3代にわたる業績は公的にも私的にも、名寄の今日に、物心両面の限りない足跡を残したと言ってよい。その功により勲四等双光旭日賞叙勲、名誉市民（元市長石川義雄さんと同時推挙）、そのお二人共通の祝賀会では、名取さんに請われて、私の妻綾子が、祝舞“羽衣”をさせて頂いたのである。

私が初めて知己を得たのは、昭和37年、杉野目北大学長が短期大学に来られたことがあり、“むらさき思親閣”で北大同窓会名寄支部の歓迎会が開催された席である。菊地完前院長に「北大同窓会なんてあったの?。」「うん、何年かに一回位あるんだ。」支部長は名取さん。メンバーは、民間では、名取さん、開業医、北陽製紙、天塩川木材（美深町）、官では、短期大学、市立総合病院、北大演習林、林務署、などの連中だった。お孫さんが両側先夫股脱でその治療中だったが、名取さんの方から、「孫がお世話になっております…。」と御挨拶されたのである。人柄が滲みでるような目許の優しい方であった。お孫さんは遺残性亜脱臼となり、北大整形外科で、島 啓吾教授によって減捻反骨切り術が施されたが、やがて北大文学部を卒業した後に重度の股関節症にたっていると聞いている。

北大同窓会はその後何回も開催され、殆ど私が代表幹事を勤めたが、日本酒を愛飲、しかも名取酒造の銘酒“福鶴”以外は飲まれなかった。帰途は菊地 完先生らと“都ぞやよい”をドナリながら御機嫌だったと言う。同窓会は、前短期大学学長小関教授の歓迎会を最後にして今日まで開催されていない。名取さんが病に罹り亡くなられたからである。名取さんあつての同窓会だったのかも知れない、と改めて思うのである。

名取酒造を閉じられた後、推されて3代目名寄信用金庫理事長に就任されたが、やがて、引退時、自ら理事、役員を説得して、久保田宏病院長と名高同期である田原靖久さんを後継者として指名したのである。田原さんにとっては3階級特進とも

言える人事であったが、現在の信金の隆盛をみる時、名取さんの先見の明の確かさ、リーダーの名に恰わしい識見の高さの証と言ってもよいと思う。

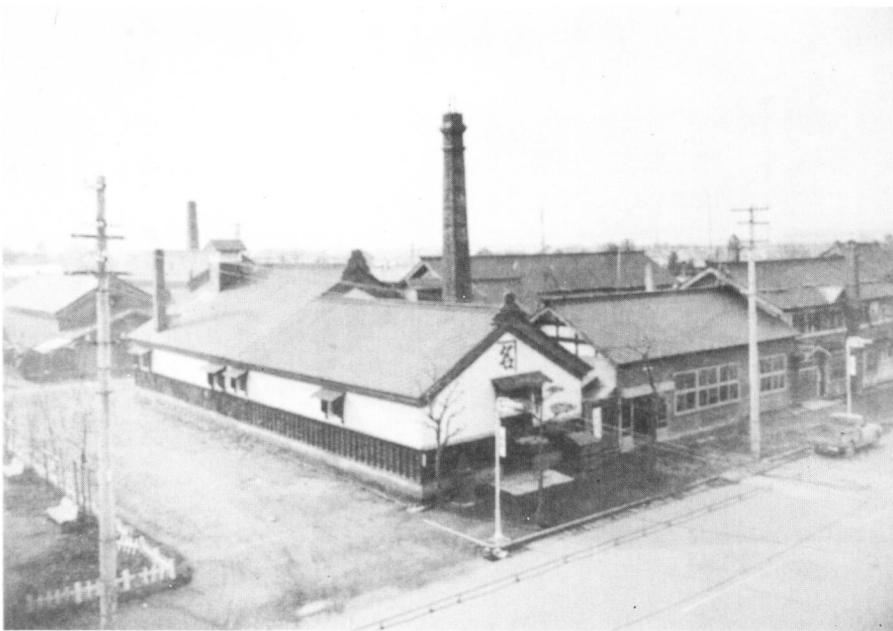
最後になった同窓会の時、「中村さん、僕もね、北大を卒業したら本州の大手酒造に勤める筈だったが親父が急に亡くなったんでね…」遠くを見る様な、己の若い日の可能性に想い及ぶ様な顔だった。しかし、その結果、戦前・戦後にかけて長期間名寄の発展のために精一杯尽力された功績は特筆すべき大きなものであった。

なお、“むらさき”は、桜木町（上川北部医師会史補遺 17 頁）の創設者の 1 人である林崎久治によるものであったが、2 代目重道が当主であった昭和 31 年に、当時の名寄市長名取さんから「名

寄の応接室ともなるべきものを造っては…」と相談を持ちかけられ、“むらさき思親閣”を完成させた。宮大工による“神殿造り”の料亭で多くの賓客が訪れた（風雪の 80 年）が今年解体された。既に名寄病院の土井契良宅はなく、現在残っている本格的な建物は、市職員会館と名寄教会だけとなった。時代の変遷と名寄の盛衰を象徴するものとおもわれてならないのである。

追記

丹羽松一社会病院 2 代目病院長は昭和 23 年退職後、現在の市職員会館で眼科の診療所を開業していた。



全盛時代の名取酒造の全景（写真提供 名寄新聞社）